

わたしを離さないで

カズオ・イシグロ

人生は無情で儚い。人は死んでしまったら逢いたくてももう逢えない。そしていつの日か自分も……。今回紹介するカズオ・イシグロ作『わたしを離さないで』は決して長く生きることのできぬ若者の愛と死を描いた物語である。

主人公のキャシーはヘールシャムという施設で育った孤児だ。この施設で育った子供たちはさらに残酷な未来を背負わされていた。それは……

「提供」

ヘールシャムで育った者は「提供者」と呼ばれ、臓器を提供し続けねばならない運命を背負っている。そして提供を繰り返すうちに、提供者自身が衰弱し、やがて死を迎えてしまう。彼女たちは何の縁もない人のために生命を消費させられる存在だったのだ。キャシーは自ら提供者でありながら、そんな提供者を支える介護人として働いていた。

物語はキャシーがヘールシャムでの日々を回想するところから始まる。キャシーの親友であるルースとトミーとの生活はとても楽しいものだった。しかし、周りの大人たちの意味深な言動やさまざまな不可解な事件から、次第に彼女たちは自らの運命を悟ってゆく。同じ運命を背負う3人だったが、青春時代特有の複雑な人間関係のせいで、彼女たちは別々の人生を歩むようになった。その後物語は3人の再会を機に急展開をみせていく。過去への後悔を抱えながら、提供という残酷な未来を背負って生きる彼女たちの姿には涙を禁じ得ないだろう。

この物語では、カズオ・イシグロの緻密な描写を感じ取れる。特に登場人物の台詞一つ一つから、彼女たちの性格や微妙な人間関係を垣間見ることができ、彼女たちにすんなりと感情移入してしまう。またこの作品は臓器提供という稀有なテーマを扱いながらも、人間関係に焦点を当てており、彼女たちの心の叫びがひしひしと伝わってくるだろう。

強制的に繰り返される臓器提供により、あっけない死という別れが待っている。そんな運命に縛られつつも、普通の人として、誰かとつながっていたいという温かな心をもつ彼女たち。そんな切ない姿が、キャシーが愛した、ジュディ・ブリッジウォーターの『夜に聞く歌』の歌詞とオーバーラップする……

ネバーレットミーゴー……

オー、ベイビーベイビー……わたしを離さないで……



著者：カズオ・イシグロ
 翻訳者：土屋政雄
 出版社：早川書房
 定価：800円（税別）